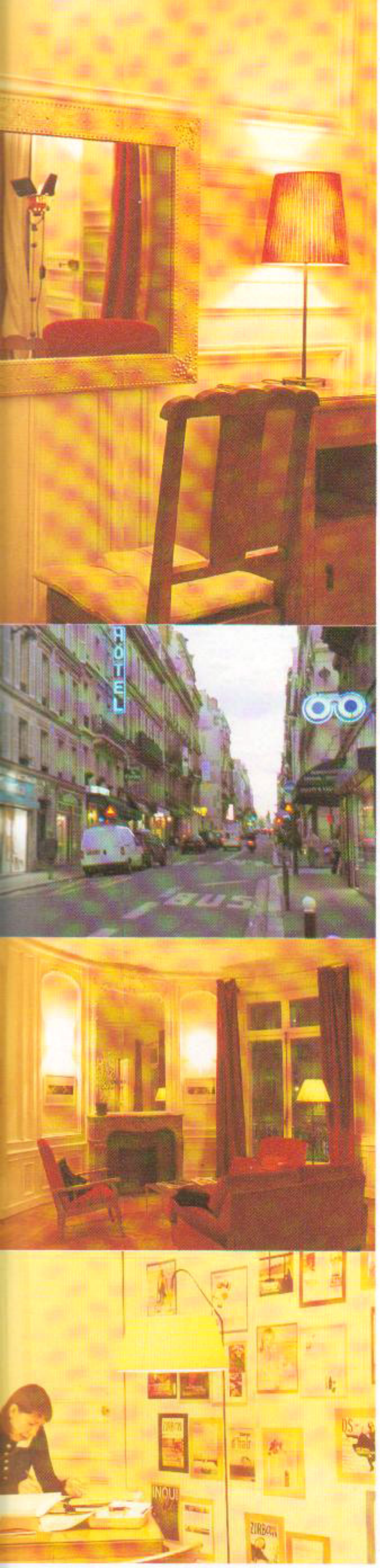


ちょっと気になる海外サロン。そっちの事情はどうなの？

PARIS WHAT'S UP

スタジオ上がりの美容師がつくり上げる、美容師嫌いが行きたくなるサロン。

LA NOUVELLE ATHENES ラ・ヌーベル・アテネ

文◎岡田小夜里
text by SAYORI OKADA
写真◎米山重雄
photo by SHIGEO YONEYAMA

「ラ・ヌーベル・アテネ」の女性オーナー、シルビー・クー・ドレイ。彼女もまた、スタジオ美容師の1人だ。

今までインタビューした中だけでも、ダビッド マレ、ジョン・ノレ、ルシア・イラシ、パトリック・オーギュスタン、クリストフ・ロバンと、スタジオ美容師がサロンをオープンするのが目につく。

彼らの考え方に共通な点は、従来の美容サロンのあり方に疑問を持っていること。「自分ならどのようにするだろうか」スタジオでの自らの経験を生かし、より自分らしい美容のあり方を表現する。

アンティークの家具を簡素に飾った、大きなパリのアパルトマンといった風貌の「ラ・ヌーベル・アテネ」も、決して「美容サロン」ではなく、「シルビー・クード・レイの美容アトリエ」と名付けられている。シルビーは、造形美術大学を卒業し、スタジオのメイクアップとして仕事をはじめた。美容に触れてからはや17年。

ケンゾー・フラグシップハウスの中にある、レストラン・コングの内装は、日本をコンセプトにフィリップ・スタルクとコラボレーションしたもの。アジア人とヨーロッパ人の顔を合成したトレードマークを見たら、シルビーを思い出してほしい。このように彼女は、エル、ヴォーグ、マリクレール、マリーフランスなどの雑誌、広告、シャネル、ディオール等のパリコレ、モード写真をつくる現場とスタジオでばりばり働いてきた。

そして、2003年9月にここをオープン。「私は、美容院が嫌いなの。だから自分が行きたくなるようなサロンを開きたいと考えたのよ」。とても、ナチュラルで、率直でハキハキした彼女の話し方に、ダイナミックさと積み上げてきた者の揺るぎない自信が感じられる。

私たちは、美容サロンに行くのにストレスを感じたり、何となく怖かったりする。騒音とまぶしいばかりの蛍光灯の光に、安心感などあったものではない。

だから、心地よさ、快適さを考え、静かな自分の家に招くようにまずはゆっくり座ってスタイルについて理解できるようにきちんと話をする。

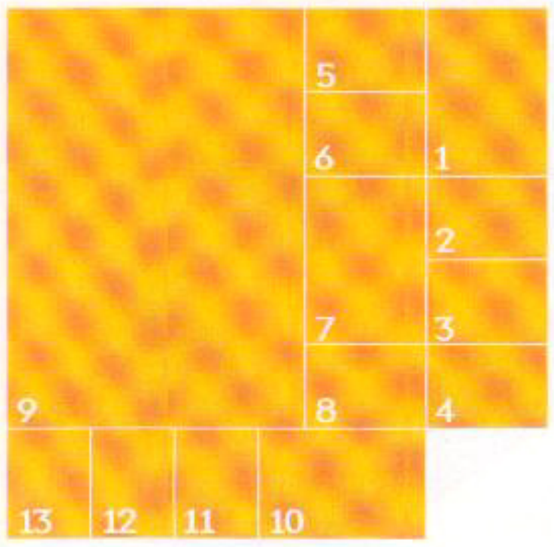
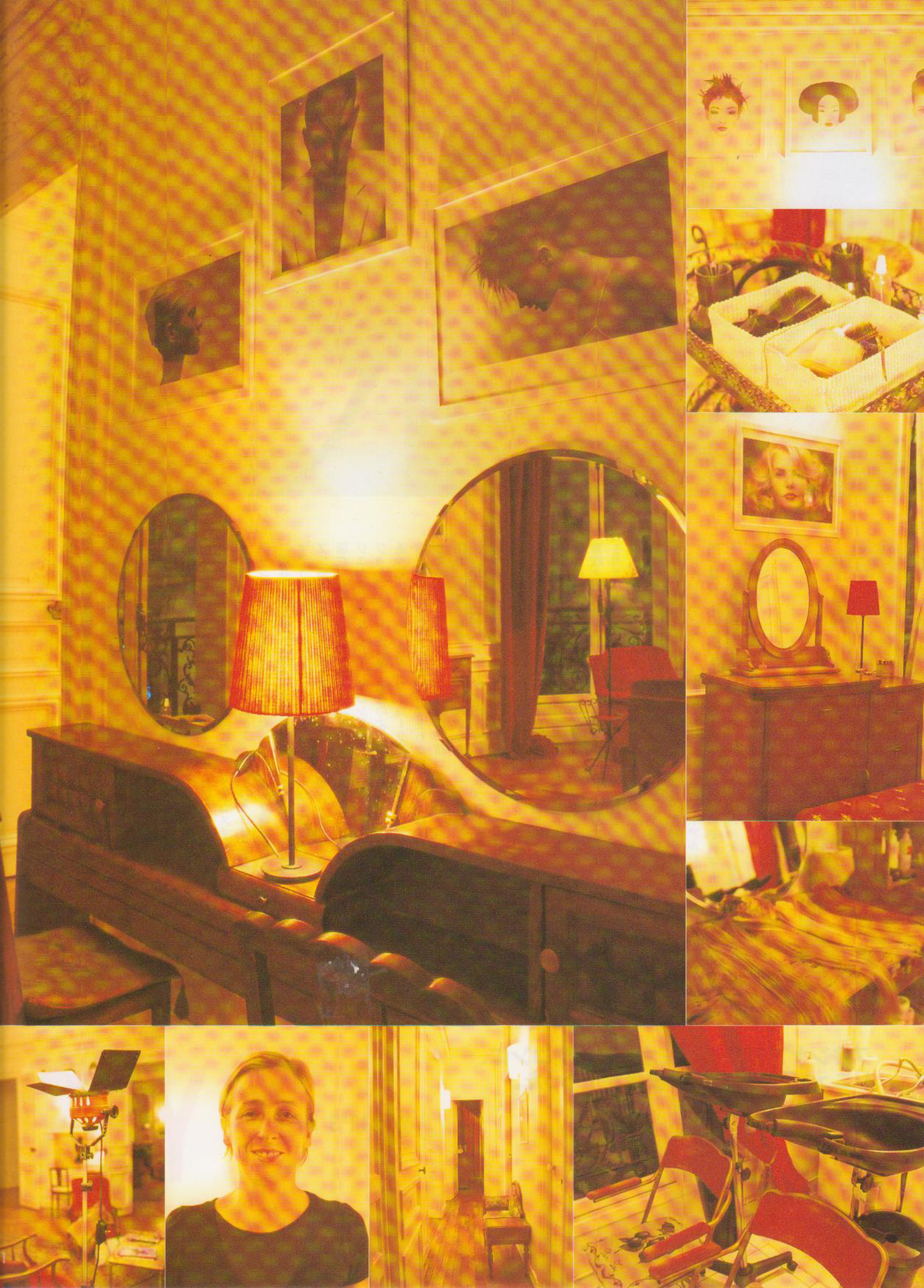
そして、必ず選択権をお客さまに委ねる。カラーが必要ない方には、あえて勧めることをしないのが、シルビーのやり方。顔の形、ラインに注意した、ボリュームについてのアドバイスがとても重要だという。

もちろんカラーも、色彩学者から学んだカラーリストが、個人に合わせた色をていねいに説明。いくらカラー自体がきれいでも、本人の肌、目、唇の色が美しく際立たなければしかたない。

テクニックはドライのみ。濡れていては、毛流も量もわかりにくい。またお客さまが、家でいつもしているドライの方法でも同じスタイルになるように。カットとスタイリングは2つの別々なもの。ブローで素敵に見えても、自分で再現できないのでは意味がないという。

「『美容は芸術』、私は美容師の仕事に敬意を感じているの。この職業の素晴らしさは、金銭面へと移行して薄れてしまった。収益性が目的であればそれはビジネスであり美容ではない。美容師は、アーティストであると主張したい」とシルビー。

「こうあるべき」という先入観念は、もとをただせば意味もあっただろうが、状況が変われば適応しなくなったこと。「枠」だけが残り、中身がない、あるいは忘れてしまったこともあるだろう。形式や周囲に捕われず、自らの根本に立ち戻り、本当のこと、大切なことをシンプルに表現するシルビーに計り知れない可能性と強さを感じないではいられない。



①シルビーがすべて選んだアンティークのセット面。
②近くの町並み。
③たくさん本の置いてある待ち合いスペース。
④プレスのソファと事務所。
⑤シルビーの作品。
⑥道具のデザインもかわいい。
⑦メイクスペース。
⑧シルビー作のつけ毛。アクセサリー的に付けるおしゃれなつけ毛。
⑨雰囲気のあるセット面。
⑩カラーのためのシャンプー台。
⑪個室をつなぐ廊下。照明が美しい。
⑫シルビーのポートレート。
⑬日光の光に近い映画用の照明。